

「性教育における理論と実践の検討」

—養護教諭の「性教育に関する推進者としての資質向上のために—

キーワード：性教育、理論、有効性、推進者、養護教諭

新潟県立新潟江南高等学校

鈴木 由紀子

<全県研修会について>

1 研修の概要

平成22年9月17日（金）に新潟会館にて約94名が参加して全県研修会が開催された。

- (1) 研究報告 新潟県立江南高等学校 鈴木 由紀子
- (2) 実践発表「ピアエデュケーション手法」からみた生徒の心の変化
～「えんみちゃん」の講演を実施した学校の取り組み～ 新潟市立明鏡高等学校 林 美佳
新潟市立万代高等学校 佐久間 千賀子
- (3) 講話1「今、あらためて考える養護教諭の仕事」 新潟県立新潟中央高等学校 阿部 康子
- (4) 講話2「養護教諭の研究のまとめ方」 新潟県教育庁保健体育課 指導主事 波多 幸江

① 研究の必要性

養護教諭が行っている実践の有効性を明らかにする。実践報告でなく研究であるためには、第三者に納得してもらわなければならない。そのためには感覚的でなく科学的評価を加えた実践を行い、その実践の有効性を明らかにしていくという研究が、これから大事になってくる。研究という視点が、これからの養護教諭の専門性を構築する上で重要である。

② 研究を進める手順とまとめ方

研究計画書の作成が重要となる→実践→データの収集及び分析→結果の解釈・考察→まとめ
解釈するためには図表をわかりやすくまとめる。他の人の書いた論文を参考にする。

③ 考察について

- ・ 他の文献と比較して見るのが大切。→引用文献を入れながら考察し、論を構築していく。独りよがりにならない。
- ・ 研究計画書で方向性を確認しながらまとめる。
→一貫性のある論述にする。

- ### ④ 研究としてまとめることで自己満足から脱却し、エビデンスを作る。エビデンスの実際の効果を科学的に証明するものを自分で作る。研究することにより養護学の構築につなげ、それが専門性の確立につながる。そして自分の仕事に自信と誇りを持つことになり、他の職員に必要とされ、理解されるとともに養護教諭の評価につながる。

(5) 講演

「養護教諭の実践の根拠は何か」

—事実、実践、エビデンスの見方・考え方と研究—（専門職性と倫理綱領）

桐生大学医療保健学部看護学科教授 鎌田尚子

① 本研究について

新潟県高等学校養護教諭研究会にお招き頂き誠にありがとうございます。研究水準の高い新潟は注目の的です。研究課題の目標を明確に示し、有効性をカイ二乗検定で検証して、今日の発表に繋げていることは素晴らしい。ただ辛口を申すならば、予め有効性とは何かの定義をして何で測るか、尺度や指導前後の正答率などを明記する。統計は、ある集団とある集団を比較した時、その差が有意であるかどうかを調べる。その有意な差が何なのかということまで追求する必要がある。差がなかったのは本当に問題がないのか、測定方法の妥当性を厳しくみていく。成績の良い集団の中にも出来ない生徒がおり、その割合は僅



少でも問題は残る。その他に含めて、はじかれる生徒たちの問題は誰が背負うのか。保健室ではそういう個別指導の対象も非常に大事になってくる。統計の見方や吟味を考察の中で考えていくと良い。量的な問題は、調査統計により集団傾向を浮き彫りに出来るが、質的な問題は「その他」の中に埋もれて見えない上、研究の枠組みから外されている問題は、俎上に上がらない。文献研究について、KJ法のカテゴリーを変えたのは良かった。養護教諭の実践はいろいろな要素が含まれているため、すぐに使えるような文献はみつからない。養護教諭には、しっかりした人が書いた総論などが参考になるであろう。ただし、総論も個人的趣味や単一学問の視点から書かれたものは、参考にならない。実践記録シートは素晴らしい。介入前後の調査もしてあり、気になっていたことも、考察の中に書かれていた。それは男子の関心が低いこと。設問が男子のニーズに合っているのかどうか、男子が性に対して関心が無いわけではない。関心が出てこないのは研究方法にバイアスがかかっているためということに気付かないといけない。それは女性が計画し指導しているということ。もっと養護教諭は、男性に対する性について、別の観点や男子のニーズを客観的に書かれた文献を探し、勉強する必要がある。一番良いのは男の子に語らせること。男女の生徒の本音を引き出し、指導内容を一緒に作っていく。指導計画に生徒を参加させると生徒たちのニーズに合ったものができてくる。地域、PTA、保護者と生徒と一緒に巻き込む性教育。生徒が本音を言い、親も聞き、一緒に授業を創造し、評価し合うという方法もある。その場合、集団になじめない子は個別に扱う配慮が必要である。また、実践の途中や実践が終わった時に記録をどう残すか、プロセスの評価やモニターの記録が大事である。その評価が組織活動の評価であり、次の課題に活かされる。生徒参加型の性教育をどう継続させていくかが重要である。



② 養護教諭の専門職性と倫理綱領について

養護教諭の専門性とは何か、独自性とは何か。医師も看護師もカウンセラーも介護士も専門職であり、みんなそれぞれ自分たち専門職の倫理綱領を持っている。今後、養護教諭は思春期うつ、自殺、DV等、人の命の関わる専門的仕事をする上で、それぞれの専門職の人たちと手を組んで、高度な情報を共有していかなければならない。そのために養護教諭は本当に専門職なのかと聞かれたときに、そうですと言える為に、養護教諭の倫理綱領を持ち研鑽する必要がある。またそれを社会に公表していかなければならない。

③ 実践のエビデンス／根拠とは何か

保健室で皆様は救急処置をしておられるが、そのエビデンスは何ですか。けがをした子どもを医者に連れて行く、行かないの判断をする根拠は何ですか。医者には診察・診断マニュアルがある。看護師には、看護診断がある。私たちは、養護をつかさどる実践はたくさんしている。しかし実践のエビデンスがまだ学問になりきっていない。文献になかったからと諦めてはいけない。優れた人の実践の経験則、経験知、そして確かな実践がある。それは独自性がなくても良い。科学的論文の形式により書かれた実践報告や追認、追従した論文が集まってくると、そこから本物のエビデンスの学問が作っていける。みなさんどんどん書きましょう。ただし、これひとつだけで「養護をつかさどる」は解決しない。新たな問題も発生する。大事なことは経験とか、いつもの実践知を子どもの現象から常に振り返りながら確かめていくことが養護教諭の確かな知識を求める力だと思う。ただ、エビデンスがあるからといって全てに適用できるわけではない。一面だけで本質を見誤らないこと。本質はどこにあるか、それは訴えてきた子どもの話をしっかり聴き、症状や客観的情報、心情などの主観情報と養護教諭の判断・処置・対応との関連から、明るい顔になり元気に保健室を出て行くという結果(エビデンス)を記録し、事例報告の省察、洞察を重ね、子どもに、数日後、判断や対応の何が適切だったかを確認し、考察を書くことが、学問への一里塚となる。生徒の心と身体に問いかけ、人間として一人一人に備わっている自然に生きる力とそのニーズに耳を傾け、気付き、引き出し、はぐくみ、育てるのが養護教諭の「養護」である。これからも、子どもと話し合っていく、聴く耳、気付く感性を磨いて子どもとともに学び、「これは研究にできないか」と問い続けていただきたい。最後に、先輩諸氏が築かれた相互に啓発し、仲間やチームで協働して研究をまとめ、発表する伝統をサクシードして下さい。